台大日本語文研究第 21 期
2011 年 6 月，頁 179-222
2011-4-28 收稿，2011-07-01 通過刊登

近代中國知識份子的日本經驗
—比較梁啟超、林獻堂、戴季陶的日本觀—

徐興慶*

摘要

本文針對梁啓超、林獻堂、戴季陶等三位近代中國知識份子的日本經驗，從比較的觀點分析他們在近代化的過程中的思想變遷，進而探討其日本觀之異同。主要論述內容爲（一）以臺灣被日本殖民的時空爲範疇，針對梁啓超的〈遊臺灣書牘〉、〈臺灣雜詩〉及相關書簡、詩文，分析其殖民及被殖民的「自－他」思想主張；（二）從林獻堂對傳統中華文化的教養與自負，及追求臺灣人不被同化、力爭平等、自主地位的角度，論析他與梁啓超、板垣退助、佐藤春夫等人的思想交流；（三）針對戴季陶撰寫《我的日本觀》、《日本論》的動機及內容，分析其武士道思想的變遷、信仰與革命思想的關連性；（四）探討三位知識份子對吸收外來思想的同調與異趣，並分析他們日本觀的形成與「近代性（Modernity）」的關連性及其意義。

關鍵詞：梁啓超、林獻堂、戴季陶、思想變遷、近代性

* 台灣大學日本語文學系教授・關西大學亞洲文化研究中心客座研究員

The modern Chinese scholars' Japanese experience—comparing Japanese viewpoints among Liang Qichao, Lien Hsien Tang and Dai Qitao

Shyu, Shing-ching*

Abstract

According to the Japanese experience of three modern Chinese scholars – Liang Qichao, Lin Hsien Tang and Dai Qitao, this study analyzed their thoughts on convergence through modernization from a comparative viewpoint to further discuss the similarity and divergence among their thoughts on Japan. The contents of discussion include（1）the analysis of Liang Qichao's colonial viewpoint "self-others" during Japanese colonial period through his works of "Taiwan Voyage" and "Taiwan Poetry;（2）the analysis of Lin Hsien Tang's thoughts communication with Liang Qichao, Itagaki Taisuke and Satou Haruo from the viewpoints of Lin Hsien Tang's Chinese cultural virtue and his effort to fighting for Taiwan's equality and independence;（3）the analysis of the relationships among the convergent thinking on Bushido, the belief and the revolution thinking;（4）the discussion on the similarity and divergence among the three scholars' assimilation of foreign thoughts.

Keywords: Liang Qichao, Lin Hsien Tang, Dai Jitao, convergent thinking, modernity

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

近代中国知識人の日本経験
—梁啓超、林献堂と戴季陶の日本観の比較—

徐興慶*

要旨

本稿は、梁啓超、林献堂、戴季陶の三人の近代中国知識人の日本経験を取り上げ、近代化のプロセスにおける彼らの思想変遷を比較研究の観点から分析し、さらにそれぞれの日本観の異同について検討を加えるものである。具体的には、以下の四点について論ずる。（一）被殖民地とされた台湾を中心に、梁啓超の「遊台湾書牘」、「台湾雑詩」及びその関係書簡や詩作に基づいて、彼の「自—他」認識の構図を検討する。（二）林献堂には、伝統的中華文化の教養とそれに対する自負、及び日本への同化を拒む姿勢が見られる。当時の台湾人の平等、自由への追求を視点に据え、林と梁啓超・板垣退助・佐藤春夫との思想交流を分析する。（三）戴季陶の『我的日本観』『日本論』の執筆動機及びその内容を取り上げ、彼の武士道に対する認識の変遷、および信仰と革命思想との関連性についての見解を分析する。（四）上記の問題意識に対する分析、および東アジアにおける近代化の思潮との関連性の観点から、三人の外來思想の同調と異趣、さらに思想の同異点を論述し、それぞれの日本観の形成がもたらした近代性（Modernity）の意義を明らかにする。

キーワード：梁啓超、林献堂、戴季陶、思想変遷、近代性

* 台湾大学日本語文学科教授・関西大学アジア文化研究センター海外研究員

近代中国知識人の日本経験
—梁啓超、林献堂と戴季陶の日本観の比較—

徐興慶

はじめに

19世紀の末から20世紀初頭にかけて、梁啓超（1873-1929）は明治日本の思想から広く、深い影響を受けた。彼の思想における西洋思想と日本思想の複雑な絡み合いについては、既に少なからぬ先行研究がある。近年の、日本における中国近代史研究において、梁啓超は最も研究されている知識人の一人である。特に彼の場合、日本に亡命した清末の知識人でありながら、西欧近代の政治思想を中国に精力的に紹介したという役割がクローズアップされている。一方、中国においては、1980年代以降、梁啓超に関する発表論文は500本を超えるが、彼と明治日本との関係についての論文は十数篇しかない。梁啓超についての専著は30種以上も出版されているが、梁啓超と日本とを主題とした論著は皆無に等しい。[1]

1911年4月に梁啓超が台湾を訪問した際、彼は殖民地時代の台湾民族運動家の林献堂（1881-1956）と交流している。このことについても、あまり研究されていないようである。[2]また、戴季陶（1891-1949）の日本観についての先行研究は多数あるが、[3]彼の日本研究や自由民権思想、革命思想をめぐる日本観の形成については、あまり注目されていない。本稿は、近代中国の周縁知識人梁啓超、林献堂、戴季陶の日本観を中心に、東アジアにおける近代化の思潮との関連から三人の思想の同異点を考え、比較研究を試み、それぞれの日本観の形成がもたらした近代性（Modernity）の意義を明らかにすることを

---

1 崔志海「梁啓超与日本：評鄭匡民『梁啓超啓蒙思想的東学背景』」、『近代史研究』（北京：中国社会科学院近代史研究所）2004年第4期、PP.179-206。

2 陳逢源「梁啓超と台湾」、『台湾文学』第1巻第2号、1941年9月、PP.70-78。以降の論考は見当たらない。

3 戴季陶に関する先行研究については、嵯峨隆「戴季陶と対日観をめぐって」、『戴季陶の対日観と中国革命』（東京：東方書店、2003 年）、PP.9-10 を参照されたい。

目的とする。

一、梁啓超と林献堂の日本観

本節では、台湾という「被殖民地」空間をめぐっての、林献堂と梁啓超、戴季陶、板垣退助、佐藤春夫らの思想交流に注目し、それぞれの日本観について検討する。

梁啓超、中国広東省新会の人。彼は清末民初の政治家、ジャーナリスト、歴史学者であり、多才な知識人として知られている。中国時代の梁啓超は近代中国の有名な翻訳家厳復（1854-1921）の影響を受けた関係で、日本の翻訳書を通じて西洋の学問を摂取するという、知識吸収ルートの開発及び近代化の促進に取り組んだ。彼は 1898 年 10 月の「戊戌政変」に失敗した後、日本へ亡命し、その際には幕末の思想家·尊王論者吉田松陰（1830-1859）に因んで「吉田晋」の筆名を用いた。彼は 1898 年に『清議報』を創刊し、1902 年（三十歳の時）に立憲君主制を唱え、宣伝活動のために『新民叢報』を創刊した。また『新小説』『飲冰室文集』といった文集も多数出版した。梁啓超は翻訳書を媒介に西洋学術の受容に進み、西洋思想における新概念を伝統的な中国中心主義の枠組みに摂取することに取り組んだ。彼の歴史観は 1902 年 2 月に『新民叢報』を創刊することによって、大きく変容した。[4]すなわち、歴史の教訓から学ぼうという伝統的な観念から脱出し、中国にない新たな「進化」、「国家」、「国民」という歴史意識が見出せるようになる。手代木有児によれば、梁啓超はこれらの新概念を以て「国民の明鏡」、「愛国心の源泉」として、中国国民の団結や民衆組織の進化を表すものと見なした。換言すれば、彼は歴史を国民的アイデンティティーの源泉として再発見したのである。[5]以来、梁啓超は 1912 年辛亥革命が成功し、中華民国が

---

4 この頃梁啓超は、初学者のための文献リスト「東籍月旦」（1902 年 6、7 月）を『新民叢報』に発表している。これは中国人に対し、日本書を通じて西洋学術を学ぼうと呼びかけるものであった。

5 手代木有児「梁啓超「史界革命」と明治の歴史学」、佐藤慎一『近代中国の思索者たち』（東京：大修館書店、1998 年）、P.84。

成立するまで、十四年間（1898～1911）にわたって日本に滞在し、言論活動を行なった。

この間、梁啓超は 1907 年 3 月に殖民地下における台湾民族運動の先駆者である林献堂と対面している。さらに、辛亥革命が激しく展開した際、林献堂の要請を受け、梁啓超は万難を排して、1911 年 4 月に長女の梁令嫻と湯覚頓氏の三人で門司から船で台湾北部の基隆に上陸し、台北、台中（霧峰）を訪問した。当時の台湾は日本の殖民地になって既に十六年経ち、台湾知識人の間では、「同化」か、「自治」かが議論されている最中であった。当時、被殖民である台湾人のイデオロギーは、(1) 日本政府の統治に従う。(2) 台湾を放棄して、大陸に従う（祖国派）。(3) 台湾人は即ち中国人、中国の民族文化の維持を自信をもって行なう（中間派）。(4) 抵抗派など、四つのタイプに分類される。林献堂は台湾の大地主でありながら、中国大陸の民族文化の維持に貢献しており、中間派と見なし得る。

（一）林献堂と梁啓超の出会い

被殖民地前期の台湾では、伝統の中華文化を求めて、北京、上海へ留学する台湾人青年が少なくなかった。台中霧峰の詩人林痴仙（1875-1915）、林幼春（1880-1939）等も、中国留学組であった。特に林幼春は長く中国に滞在し、梁啓超の「戊戌変法」の維新改革に賛同したため、いつもその民権思想の言論を林献堂に紹介していた。[6] これが林献堂と梁啓超とが出会うきっかけとなる。1907 年 3 月、林献堂は初めて日本へ赴き、帰りは東京から奈良を経由し、日本留学の経験者甘得中[7]と共に梁啓超の滞在先である「双涛園」を訪ねた。三人は初対面時、筆談で会話を交わした。その際、梁啓超は「本是同根、今成異國、滄桑之感、諒有同情……今夕之遇、誠非偶然」[8]と、

---

[6] 謝金蓉『青山有史：台湾史人物新論』（台北：秀威資訊、2006 年）、PP.50-51。

[7] 甘得中は 1883 年に台湾の彰化に生まれた。幼い頃から私塾で漢学を勉強し、後に彰化の公学校に入学した。彼は日本留学を終えた後に台湾で中央商会を営み、板垣退助が発足した「台湾同化会」に参加し、積極的に各種の文化活動に参加し活躍した人物である。官派の台中州協議會員（1920～1935）、台中州議員（1936～1939）を歴任し、皇民化時期には「皇民奉公会」台中州支部委員も務めている。

[8] 『林献堂先生年譜』、『林献堂先生紀念集』巻 1（『近代中国史料叢刊続編』第

異国人となった林献堂に同情と歓迎の意を表した。そして、被殖民となった台湾人は自由、人権問題などについて如何に対応すべきかという、林献堂からの問いに対して、梁啓超は次のように答えた。

> 中国が今後三十年のうちに、台湾人の自由権を奪回する能力をもつことは絶対にない。故に台湾同胞は軽率な行動を慎み、無駄な犠牲を避けるべきである。アイルランド人がイギリス人に対抗する手段を模倣して、日本の政界の要人と要領よく付き合い、台湾総督府の政治を牽制すれば、台湾人への過度の弾圧を防ぐことができるだろう。(原漢文)[9]

この会談は僅かな時間だったが、林献堂の思想や行動に影響を与え、後の台湾人の政治運動が中間路線を取ることを間接的に決定づけたのである。この際、林献堂は梁啓超を台湾に招く意を伝えている。

(二)「遊台湾書牘」から見た梁啓超の日本観

1911 年 4 月、梁啓超一行は台北訪問を終えた後、五日間ほど台中霧峰にある林献堂の邸「莱園五桂楼」を訪れ、「萬死一詢諸父老、豈緣漢節始沾衣」[10]の詩を詠んで、「櫟社(詩社)」の台湾知識人と交流した。「櫟社」は、台湾が日本の殖民地になった後、霧峰林家の古典詩である林朝崧(林痴仙)が 1902 年に創った詩社であり、当時最大の規模を有し、影響力が最も大きかった。[11]林献堂が 1910 年に社員として加わり、その政治的な色彩は一層高まった。「櫟社」と名づけたのは、「我が学は世用に非ず、棄材と謂われ、心は死灰の如く、朽木となる。櫟とは不材の木なり」という理由からである。つまり、「櫟社」とは、殖民地化された台湾知識人が「世用に非ざる棄材」と見なされることへの鬱憤を表している。[12]「櫟社」の社長傅錫祺

---

10 輯、台北:文海出版社、1960 年)、P.31。

9 前掲『林献堂先生年譜』、P.31。

10 前掲『林献堂先生年譜』、P.40。

11 「櫟社」は林癡仙が発起した詩社で、「南社」、「瀛社」と並ぶ、殖民時代台湾の三大詩社の一つである。「櫟社」の中心社員は台湾議会設置運動、『台湾青年』の創刊、台湾文化協会の成立など、社会、政治、民族運動に大きく貢献している。詳しくは、黄美娥「日治時代台湾的詩社活動」、『四百年時空名家書法』(台北:台北市政府文化局、2010 年)、PP.78-85 を参照されたい。

12 林幼春「櫟社二十年間題名碑記」、『林献堂先生年譜』、『林献堂先生紀念集』巻 1、PP.38-39。

が「滄海裁桑之後、我輩率為世所共棄之人、棄學非棄人不治、故我輩以棄人治棄學」と日本統治への不満をこぼし、[13]『台湾通史』の作者連雅堂（1876-1936）が「海桑以後、士之不得志於時者、競逃於詩、以寫其侘傺無聊之感、一倡百和、南北並起、其奔走而疏附者以十數、而我櫟社岐立其間、左縈右拂、蜚聲騷壇」[14]と述べているように、社員たちは自らが放棄されて志を得ない遺民集団であると感じていた。そして、亡国の哀愁を発するかのように、詩作を通じて中華文化や漢学研究を維持しようとしていた。

梁啓超は失望した「櫟社」の社員らに対し、「文を以て身を終ふるに非ず」といい、国家の政治や社会に奉仕しなければならないと励ました。林献堂にとって、梁啓超の台湾訪問は確かに台湾の政治、社会運動において躍進させる意義をもっていた。同時に大正期以降の殖民時代における台湾新文学運動に携わる青年にとっても、未来の「革命の実行」に向けて、多くの課題を与えるものであった。[15]

当時の台湾の教育政策において、台湾総督府は台湾人を同化するために、日本語教育を実施してはいた。しかし、一般庶民の知識レベルは低いものであった。知識人でさえ、近代の知識や思想、あるいはアジア情勢や国際情勢について、殆ど無知の状態であったといっても過言ではなかった。一方、梁啓超は林献堂の要請を受け、「他者」として、「統治者（日本）／被統治者（台湾）」の行政組織、殖産興業の農業政策、貨幣制度及び教育などについて事情調査を行なった。その上、僅か十数日の台湾訪問で、八十九首の詩と十二首の詞を作り[16]、さらに「遊台湾書牘」という紀行文を書き残した。そこには、六通の書簡及び「蝶恋花」（感春遊台湾作）、「浣渓沙」（台湾帰舟晩望）などの「台湾雑詩」が収録されている。[17]

---

[13] 傅錫祺『櫟社』第 1 集序文、『林献堂先生年譜』、『林献堂先生紀念集』巻 1、P.38。
[14] 連雅堂『櫟社』第 1 集序文、『林献堂先生年譜』、『林献堂先生紀念集』巻 1、P.39。
[15] 前掲謝金蓉『青山有史：台湾史人物新論』、P.63。
[16] 梁啓超はこれらの詩作品を『海桑吟』として編集するつもりだったが、その後、中国の政局が急変したため、出版は実現されなかった。
[17] 梁啓超「遊台湾書牘」、『飲冰室専集』之 22、『飲冰室合集』7（上海：中華書局、1941 年）PP.197-207。

1、梁啓超の「台湾雑詩」から見た日本観

台湾を訪れた梁啓超は、フランス、スペイン、オランダ、日本などの外来政権に攻められ統治された台湾の歴史を振り返って悲しみ、下記の五言律詩を詠んだ。

千古傷心地、畏人成薄遊。山河老舊影、花鳥入深愁。

人境今何世、吾生淹此留。無家更安往、隨意弄扁舟。[18]

梁啓超は台湾を「千古傷心地」であると形容し、「もし鄭氏（鄭成功一族）の政権が維持できていたら、台湾は今日の有様（日本の殖民地になる）にならなかっただろう」と嘆いた。[19]

周知のように日清戦争に敗北した清国は、下関条約により台湾及び澎湖諸島を日本に割譲した。この条約によって、台湾人は突然日本人になることが決定した。しかし、当時の清国の一部の官僚と住民は不満を抑えきれず、1895 年 5 月 23 日に駐台湾の各国領事館に「台湾民主国」の独立を発表し、25 日に台湾民主国の成立を宣言した。独立式典では、元清朝の台湾巡撫唐景崧（1841-1903）を総統に選出するとともに、行政立法の機関を定め、紙幣、郵券を発行し、島民に布告を発し、国家組織を整えた。しかし、同年 11 月 18 日に台湾総督府による全島平定宣言が出され、「台湾民主国」は滅ぼされた。梁啓超は台湾の故老（知識人）から台湾民主国の紙幣及び郵券を贈られたことがある。これに対し、彼は下記の詩を詠んだ。

曾聞民主國、奄忽落人間、即事真如戲、乎天亦苦艱。

薛蘿哀楚鬼、禾黍泣殷頑、暗記留蠶紙、愁來一洗顔。[20]

「曾聞民主國、奄忽落人間、即事真如戲、乎天亦苦艱」とは、天上から突然落ちたかのように、「台湾民主国」の成立は熟考の上で為されたものではなく、遊びのようにでたらめすぎた、という意味。「薛蘿哀楚鬼、禾黍泣殷頑、暗記留蠶紙、愁來一洗顔」とは、故国（台湾民主国）の破滅に対する哀愁を表したもので、激しく世は移り変

[18] 梁啓超「台湾雑詩」、前掲『飲冰室専集』之 22、P.204。
[19] 前掲梁啓超「台湾雑詩」、P.204。
[20] 前掲梁啓超「台湾雑詩」、P.205。

わり、もの（紙幣と郵券）は残ったが、かつて日本軍に抵抗した人物は他界してしまった。殖民地下の台湾の苦しみを描く一首である。清末の「百日維新」の著名人物で、「維新四公子」と称され、「戊戌六君子」の一人である革命家譚嗣同（1865-1898）は、日清戦争の前に科挙に落第したため、台湾へ渡航し、親戚の唐景崧のもとへ身を寄せたことがある。譚嗣同は 1896 年 2 月に北京で梁啓超と知り合った。以降、二人は政治改革の「革命の戦友」ともいうべき関係となった。1898 年 8 月に変法派のクーデターが失敗したのち、康有為、梁啓超はいち早く日本に亡命したが、譚嗣同は逃亡の勧めを断り「改革の礎になる」と自ら捕らわれ、三十三歳で北京城内の菜市口で処刑された。のち、梁啓超は『譚嗣同伝』を書き、譚嗣同を自ら死を選んだ「烈士」として描いた。次の一首は、かつての戦友を偲ぶ五言律詩である。

西北濤頭起、故人曾獨來。徙薪謀議苦、横海壯志擢。碧血隨青史、名山脱苦哀。欲尋舊墓迹、潺雨長莓苔。[21]

「故人曾獨来」は、かつて譚嗣同が一人で台湾に来たことを指す。百日維新の失敗後、梁啓超は譚嗣同に亡命を勧めたが、断られた。譚嗣同は改革には必ず犠牲者がいると考えた。梁啓超は、死を以て改革の志士を啓発しようという譚嗣同の愛国行為を「碧血隨青史」と偲んでいる。譚嗣同は日清戦争の敗戦後、『仁学』（1896、1897）を著し、早くから民権思想を唱え、その後の中国革命の志士たちに強い影響を与えた。そして、梁啓超は日本に亡命してから明治維新の西洋思想に接することによって民権思想を抱き始めたのである。親しい故人が訪れた旧地で戦友を偲ぶ梁啓超は、その耐え難いまでの精神的な苦しみをこの詩において描写している。

2、書簡に見える日本観

梁啓超は清政権から外れた周縁知識人であり、日本への亡命者としての台湾訪問には実に複雑な心境が絡み合っている。以下、彼の心境を描く書簡の内容をいくつか紹介しよう。

[21] 前掲梁啓超「台湾雑詩」、P.206。

> 歸舟所滿載者哀憤也。舟中西望故國、豈惟慨嘆！直不寒而慄耳。此行所最感者、則生計上之壓迫是也。一受此壓迫、殆永劫無擺脱之期、吾於全台遊歴過半、見其一切日用品、殆無不來自日本、如所穿之屐及草履、所食之麺及點心皆然、擧其小者、大者可推矣。中國貨物殆杜絶不能進口、保護關税之功用其可畏有如此者。（中略）而日本貨之價亦遠貴於日本本境（中略）就此趨勢推之、其將來豈堪設想、我還顧我祖國其將來又豈堪設想也。[22]

梁啓超が日本統治下の台湾を急いで視察してみての感想は、まず「哀憤」であり、最も考えさせられたのは、台湾人の日常生活における深刻な経済問題であった。また、中国の物資の台湾への輸入禁止を懸念している。

3、不平等政策下の台湾に対する同情

梁啓超は台湾の殖民地政策に対し、次のように言う。

> 私は悲しい気持ちで台湾に来た。台湾の居民は皆族類で、性質習俗も内地（中国）と同様である。殖民地における制度の実施は台湾人の習性に従って考えるべきものであり、その政策の実施は台湾人の習性を考えて行うべきものである。（原漢文）[23]

短期の台湾滞在ではあるものの、梁啓超は不平等政策に対して、「耐え難い気持ちがする」と反応し、さらに次のようにいう。

> もし台湾が善政の地と称されるならば、その政策はいずれの国において実施してもよいでしょう。もし台湾特有の政策（不平等政策）が日本の内地、他の文明国で実施されていないのなら、わが国が学ぶことはないし、私も我慢して発言をおさえることはしません。この十日間、傷ついた心は涙で満ち、耐えられない気持ちである。（原漢文）[24]

4、日本の殖民地政策を手本に

また、梁啓超は「台湾の旅においては、日本の行政の良い面を手本とし、それを中国人に告げようと思っていたが、大変失望した。

---

[22] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、PP.203-204。
[23] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、P.201。
[24] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、P.201。

とはいえ、日本の殖民地政策にも見習うべきことが一、二点ある」という。手本とする分野は貨幣改正、専売制度、水利、土地及び戸籍の調査、衛生などである。さらに、「最新の技術を応用することについては万国から賛嘆を得ているので、私には批判することはできない。むしろ謙虚な態度で学ぶべきであろう」という。[25]また、「日本人の技師が多いが、地位が高くない。わが国ではこれを学び、各種の技師を養成するのに、少なくとも十年はかかる。大したものである」。[26]しかし、梁啓超はこれら「日本の良さ」を中国へ移植しようとする意図をもっていた。彼はいう。

> 日本人から台湾への移民は、うまくいっている。今日わが国（中国）が東三省、モンゴル、チベットに対する内地殖民政策を施す際に、必ず手本とすることができる。（原漢文）[27]

彼は亡命者として、被殖民である台湾人に対して「哀憤」と同情の気持ちを表す一方、中国の内地殖民政策には賛同し、日本の移植の仕方を手本にしようとしている。愛国（覇権）主義から脱していない、こうした矛盾は不思議なものに思われる。

（三）甘得中と戴季陶

1913 年、林献堂は北京へ外遊し、中国国民党の要人と接触した。一方、東京に滞在中の秘書の甘得中は日本の自由民権運動のリーダー板垣退助(1837-1919)の紹介で、戴季陶と会談することになった。これから台湾総督府の不平等統治にどう対応すべきかについて、甘が戴季陶に問うと、次のような回答を得た。

> 祖国は現在、袁世凱政権討伐のため、十年間は台湾を支援する余裕はない。たとえ袁世凱政権を滅ぼしても、その後始末には時間がかかる。日本は民権思想の洗礼を受けていない国家なので、革命のことを洪水猛獣のように恐れている。君たちが革命党と往来するなら、弾圧されることは必至であり、同情される

[25] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、P.203。
[26] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、P.203。
[27] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、P.198。

ことは絶対無いし、その利を受けないうちに害を先に蒙ることとなる。そのため、別に日本の政界の要人と交渉するルートを開いて、日本の朝野の同情を得る必要がある。そのコネによって、台湾総督府の政策を牽制し、台湾の同胞の苦しみを減らすことが出来るだろう。(原漢文)[28]

偶然かもしれないが、戴季陶はほぼ梁啓超と同様の意見を甘得中に伝えた。この頃、戴季陶は孫文の秘書として日本へ随行し、三たび首相を務めた桂太郎(1848-1913)など日本側の要人と会談している。二次革命の失敗を喫したところでもあり、そのため戴季陶は日本側が革命のことを懸念していることを伝え、台湾で弾圧されないように、革命党(戴季陶のこと)との往来は控えた方がよいと甘得中に注意を促したのである。

(四)「台湾同化会」をめぐる林献堂と板垣退助の交流

「台湾同化会」を発足するために、林献堂は1914年11月に従兄の林烈堂と共に東京へ赴き、板垣退助の台湾訪問を要請した。[29]要請を承け、板垣は同年2月に台湾を訪問し、11月にも再び台湾を訪れている。なお、林献堂をはじめ、台湾の社会運動家蔡培火(1889-1983)[30]、蔡恵如(1881-1929)[31]らのいわゆる「同化」とは、「台湾人の地位と待遇を良くして、日本人と同様に扱われるように」

[28] 前掲『林献堂先生年譜』、P.32。

[29] 林献堂の年譜によると、同時期、やはり板垣退助の紹介で、彼は従兄の林烈堂と共に早稲田の私邸で大隈重信にも会見している。

[30] 蔡培火は、東京高等師範学校への留学経験もある林献堂の親友である。彼は1920年より「台湾民報」の編集と発行人を務め、1923年には台湾文化協会に加入し、「台湾議会設置請願運動」の推進に協力した。その後治安維持法違反によって逮捕され、蒋渭水とともに4ヶ月の刑を受ける。1927年に文化協会が分裂した際、蔡培火は蒋渭水らと共に台湾民衆党を結成した。ところが台湾民衆党においても、蒋渭水による労働者農民運動を支持する動きに対して不満が募るようになる。1930年8月、蔡培火は台湾地方自治聯盟に加入し、12月には台湾民衆党から除籍された。1937年、日中戦争の勃発とともに、総督府から離れて東京に向かい、1942年には東京から上海へと転じた。

[31] 蔡恵如、原籍は福建省、台中県清水鎮の人。台湾社会運動のリーダーの一人で、1914年に「同化会」に入会した。1918年10月に林献堂、林幼春と共に台中で「台湾文社」を創設し、古典漢詩を中心とする台湾初の漢文雑誌『台湾文芸叢誌』を発刊した。彼は1919年に日本の台湾人留学生に「啓発会」、「応声会」を発足させたほか、1920年に「新民会」を創設し、林献堂を会長とし、自分は副会長に就任した。

ということを指す。帝国主義、軍国主義下の台湾総督府が一方的に強制したところの、日本国のために「忠を尽くす」ことを重視する「同化」とは異なり、台湾人に対する不平等政策を取り除くことが目的とされていた。

他方、板垣退助が考える「同化」とは、「兄弟之邦」の日中両国は文字も文化も同一の根源を有するので、東アジアの民族が欧米の民族と比肩しようとするならば、まず日中両民族が融合し団結することが必要である、というものであった。その目的を達成するために、まず台湾で生活する内地人（日本人）と本島人（台湾人）の差別待遇を無くして、政治、経済の面においても同じ立場に立ち、文化生活上では融合を促進することに着手しなければならない。つまり、人権と自由を被殖民の台湾人にも与えるべきだという点において、林献堂と板垣退助は同調したものと思われる。板垣退助を中心に、林献堂らの奔走で「台湾同化会」が 1914 年 12 月 20 日に台北鉄路飯店で結成された。上述の理念は直ちに台湾全土に広がり、約三千人が結集し、後の台湾民族運動に大きな役割を果たした。[32]しかし、日本政府の「同化政策」は、文官総督と呼ばれる田健治郎（1855-1930）から始まるもので、当時の民政長官後藤新平（1857-1929）は「無方針を方針とする」声明を出した。これらは、板垣退助の「日本と殖民地の間の不平等を無くす」同化主義とは、かなり異なるものであった。かつて後藤新平は台湾総督府医学校学生一同に、

> 汝曹は三千年来皇国に忠誠を尽くした母国人と同等の待遇を求むるならば、今後八十年を期して母国人に同化するやうに努力せよ、それまでは差別されても仕方なし、不公平を言はず、全島民の範となれ。[33]

と誨告した。「台湾同化会」は、総督府の弾圧により、結成からわずか二ヶ月後の 1915 年 2 月 26 日に解散させられた。

---

[32] 板垣退助は林献堂と一緒に台湾を周り、「日本は台湾を殖民地にしたが、決してすべてを収奪しようとするのではなく、一緒にアジアの中の強国として欧米列強に対抗できるように」と説き続け、賛同者に呼び掛けた。

[33] 蔡培火『日本々国民に与ふ』、P.42。

（五）教育に関する梁啓超と林献堂の日本観

1911 年 4 月、梁啓超の台湾訪問時期は、総督府による「国語（日本語）普及運動」が促進されている最中であった。彼は学校教育の現場を見学し、学生と会話した感想を、下記の「公学校」と題した詩に詠んだ。

道周逢群童、人言是學生。借問何學級、所學何課程。
此間有良校、貴人育其英。島民賤不齒、安德抗顏行。
別有號公學、不以中小名。學年六或四、入者吾隸萌。
所授何讀本、新編三字經。他科皆視此、自鄶寧足評。
莫云斯學陋、履之如登瀛。學塗盡於斯、更進安所營。
貴人豢我輩、本以服使令。豈聞擾牛馬、乃待書在楹。
漢氏厲學官、自取壞長城。秦皇百世雄、談笑事焚阬。[34]

殖民地下における台湾の学校教育制度は公学校（台湾人）と小学校（日本人）とでは、それぞれ授業の内容が異なっている。公学校で読本として新編の「三字経」を教える漢文教育は、大事とはいえ、長く続けられるのだろうか、と梁啓超は当時統治者の学校管理や教育方針の「改正」を懸念している。また、彼は台湾の知識人に対し、「臺灣識字之人少、更十年後、非惟無識中國字者、亦將並無識日本字者矣。寄語國中父老昆弟、勿以亡國二字為禪、勿為大國順民可以鑿飲也。懷抱千萬書何能究？」と、[35]亡国を口実に大国（日本）の順民になっても安逸に暮らせるとは限らない、万書を持っていても教育（政策）には役に立たない、教育の環境作り、教育制度の是正とその対応策を出さないと、十年足らずで台湾人は「中国字」（漢文）が読めなくなると、危機感を表明した。

1、公学校と漢文教育

1895 年、日清講和条約の締結によって、台湾が日本に割譲された後、総督府は「芝山巌学堂」を創立し、日本語、台湾語の二言語併用対訳法を施し、翌年、台湾総督府直轄の「国語伝習所」を各地で

[34] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、P.202。
[35] 前掲梁啓超「遊台湾書牘」、P.202。

開いた。いずれも台湾人に対する日本語の普及を第一目的としたものである。さらに 1898 年に「公学校令」が公布されると同時に、総督府は「国語伝習所」を廃止し、台湾全島の五十五箇所において公学校を開設した。これは統治者の主導による初等教育機関である。それまで台湾全島の幼児教育は「書房」に任せられており、母語（閩南話、客家話）の白話文の教材を選び、台湾の約二百ヶ所において読書及び漢文教育が実施されていた。[36]1912 年に「台湾公学校規則」が改正され、日本語教育において母語の使用は一切禁止され、1913 年に公文書の漢訳文も廃止された。その後、1937 年 3 月盧溝橋事件の勃発により日中両国が全面戦争に突入した関係で、総督府は「漢文」科目を廃止し、皇民化運動を推進した。教材には軍国主義称賛の文章が多くなり、皇室への忠誠や愛国などを強調した文章も多く取り入れられるようになった。[37]如上の、総督府が主導した一連の教育政策は、国語教育の投入や台湾人が使用した台湾話（閩南語、客家話など）及び漢文教育を廃止することを主眼としていた。

王順隆「日治時期台湾人漢文教育的時代意義」によれば、当時「書房」による漢文教育は、統治者の方針と相反するものであったため、その授業の内容が大幅に改変させられたという。具体的にいえば、国語を必修するほか、漢文の授業には『台湾教科用書—漢文読本』を使用し、総督府配布の『大日本史略』、『教育勅語』、『天変地異』、『訓蒙窮理図解』などの漢訳本も用いられるようになった。つまり、殖民地時代の漢文教育には、統治者と被殖民者の間における伝統文化教育の存続問題をめぐっての争いという側面もあった。先に後藤新平がいう「無方針を方針とする」同化政策は、台湾の特異性を口実に専制政治を実施する方向へと転換していくのである。

---

[36] 「公学校令」が公布された後も、各地の「書房」による教育は許可されていた。しかし、1933 年には総督府より書房開設の禁止令が出されている。

[37] 「台湾における殖民地時代の日本語教育年表」による。

2、林献堂と実現されなかった「私立台中中学校」

1914 年 12 月「台湾同化会」が勢いよく展開していく直前、林献堂は秘書甘得中の建言に従い、台湾人子弟のために私立中学校を作ろうとしていた。当時、林献堂は従兄の林紀堂、林烈堂から熱心に寄付金を募り、かつ中部の紳士辜顯榮（1866-1937）、呉德功（1850-1924）らに呼びかけて、二十万元あまりの募金を得た。この募金を基に、台湾総督府に私立中学校の設立を申請したが、台湾人出資の学校運営は認められなかった。しかし、総督府から公立学校としての運営なら設立可能であると知らされ、そこで、林献堂らは台湾人子弟のみの受け入れを条件に、全額の募金を総督府に渡した。この日台の交渉により、後に公立台中中学が設立されたが、総督府は朝鮮殖民地を例に、高等普通学校、州立台中一中（現在の国立台中一中）へと校名を改めた。[38]当時、台湾人の献金活動は自由であったが、教育事業を興す権利は無かった。矢内原忠雄（1893-1961）によれば、林献堂による統治者への私立台中中学校設立請願は「台湾民族運動の第一声」であり、本島人側が台湾同化会の趣旨の中「内地人同様の権利待遇」を要求する運動を起したのに対し、総督府は同じく同化会の趣旨である「日本人同様に化育する」方面を採り、統治の方針として、同化主義を標榜するに至ったと指摘している。[39]

1919年に「台湾教育令」が発布され、台湾の近代高等教育制度が始まった。当時、内地人のために医学専門部、高等商業学校が設立された。本島人のためには医学、農林、商業専門学校が開校され、1920年には共学となっている。

[38] 前掲『林献堂先生年譜』、P.45。
[39] 矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」、『矢内原忠雄全集』巻 2（東京：岩波書店、1963 年）、P.378。

1927年台湾高等学校における
在籍日本人学生と台湾人学生数の比較

	台湾高等学校	台北医学専門学校	台北高等農林学校	台北高等商業学校	台南高等商業学校
日本人学生数（割合）	472 人（86%）	133 人（47%）	208 人（94%）	218 人（94%）	85 人（63%）
台湾人学生数（割合）	75 人（14%）	153 人（53%）	13 人（6%）	14 人（6%）	50 人（37%）
総人数	547 人	286 人	221 人	232 人	135 人

（上記の学校は台湾総督府所管学校として設立されたもので、外地では初の高等学校であった。）

1927年の統計数字を見ると、医学の分野では台湾人学生の割合が過半数の53%を占めたものの、他の分野では日本人学生が八割を超えており、不均衡が見られる。なお、1928年に創設された台湾大学の前身、台北帝国大学の学生数の分布を見ると、1928年（昭和3年）4月の入学者は、文政学部19名（日本人16名、台湾人3名）、理農学部36名（日本人33名、台湾人3名）で、台湾人学生は全体の約11%弱を占めている。1932年（昭和7年）4月の入学者は、文政学部96名（日本人83名、台湾人13名）、理農学部91名（日本人82名、台湾人9名）で、台湾人学生は全体の約13%弱を占めている。1934年（昭和9年）4月の入学者は、文政学部65名（日本人49名、台湾人16名）、理農学部63名（日本人53名、台湾人10名）で、台湾人学生は全体の約20%弱を占めている。1940年（昭和15年）4月の入学者は文政学部86名（日本人81名、台湾人5名）、理農学部91名（日本人85名、台湾人5名、その他1名）で、台湾人学生は全体の約5%弱を占めている。終戦まで台湾人に対して不公平な教育制度が依然として存在したことが窺え

る。[40]

「台湾同化会」の運動が失敗してからも、林献堂は依然として台湾の民族運動を続けた。彼は 1918 年 8 月に東京へ行き、東京の台湾留学生と頻繁に接触するようになった。1919 年 10 月に再度東京へ行き、新任の台湾総督田健治郎に会い、台湾の政治改革を訴えた。1920 年 3 月に台湾の留学生組織「新民会」が東京で発足し、同年 7 月 16 日には、その機関紙『台湾青年』(月刊) が東京で創刊された。同年 11 月 28 日に林献堂は在日台湾留学生を東京麹町のキリスト教会に集め、日本帝国議会に「六三法案」を撤廃するように訴えた。[41] 同年 12 月、彼は「新民会」の会長に選ばれた。そして、「六三法案」を撤廃する訴えとの絡みで、1921 年 2 月に林献堂は「台湾議会設立請願運動」のリーダーに選ばれた。同年 10 月の時点で計 178 人の連署を得て、日本帝国議会に提出した。以降、連署の数は年々増え、十三年間、十五回にわたって奮闘したが、いずれも失敗に終わった。[42] なお、この請願運動の基本思想は民族自決、民主主義と不可分であった。東京の台湾留学生は、吉野作造（1878-1933）の民本主義、及び東大の学生会によって組織された「新人会」の民本運動、1919 年、日本帝国主義に反抗した朝鮮の独立宣言などに影響されたものと思われる。

（六）林献堂と佐藤春夫

近代日本の著名な作家佐藤春夫（1892-1964）は 1920 年 6 月の末から 10 月の末まで、台湾一周の旅をした。それをきっかけに、佐藤

---

[40] 鍾清漢『日本殖民地下における台湾教育史』（東京：多賀出版、1993 年）付表「台北帝国大学年度別教員数及び学生数」、P.345。

[41] 「六三法案」とは、1896（明治 29）年 3 月 14 日に台湾総督府より日本帝国議会に提出された第六十三条の「台湾で実施する法令に関する法律案」を指す。この法案の重点は「台湾総督府はその管轄区域（台湾）において、有効な法律を公布、命令を有す」という点にあり、台湾総督府に行政、立法の大権を与えた法律である。この法律は同年 3 月 30 日に公布された際「本法律は実施の日から満三年まで有効」と期限を付けられたが、台湾統治の便宜上、総督府は二度その期限を延ばした。当時、大半の台湾人は、この「六三法案」を、「悪法の源」と見なし、撤廃すべきものとして訴えつづけた。東京では、すでに 1918 年の冬に「六三撤廃期成同盟会」が結成されている。

[42] 前掲『林献堂先生年譜』、P.59。

は日本の殖民地支配に対する批判と台湾ナショナリズムへの共感を語り始めるようになる。[43]台湾旅行の後、十二年を経て、佐藤は「殖民地の旅」(『中央公論』9 月、10 月号、昭和 7 年)という旅行記を発表した。そして、1936 年 7 月には台湾に題材を取った作品集『霧社』を東京の昭森社から刊行し、そこに「殖民地の旅」が収録されている。興味深いことに、同書が太平洋戦争中(1943 年 11 月)に再版される際、「殖民地の旅」は他の小品集に差し替えられた。台湾文学研究の専門家河原功は、「殖民地の旅」の発表時期が遅すぎることや再版時の差し替えに気づき、その真相について、「佐藤春夫の台湾旅行は緻密な計画によって、異なる被殖民者数人の台湾人を登場させて、種々のタイプを一通り描こうとした」からであろうと推測している。[44]

「殖民地の旅」によると、佐藤春夫は通訳者 A 君[45]を通じて、阿罩霧庄(現在台中の霧峰)の林熊徴と名乗る人と会談したという。しかし、林熊徴は台北の大資本家なので霧峰にいるはずはない。戴国煇、河原功両氏によれば、佐藤春夫は林献堂の名をわざと林熊徴に変えたという。[46]当時、佐藤春夫と林献堂の会談は、台湾総督府にとってタブーとされる殖民地台湾における支配と被支配、不平等、同化など、微妙な問題が絡んだもので、しかも、日本当局の監視下に行われたものである。民族問題を写実的に描く「殖民地の旅」の刊行は、佐藤春夫にとっては扱いにくい問題であり、河原功の疑問は無理もない。[47]

次に、佐藤春夫と林献堂の会談内容について触れてみたい。

---

[43] 藤井省三「佐藤春夫『霧社』解説」、佐藤春夫『霧社』(日本殖民地文学精選集 017 台湾編 5、東京:ゆまに書房、2000 年)、P.3。

[44] 河原功「佐藤春夫「殖民地の旅」の真相」、『台湾新文学運動の展開:日本文学との接点』(東京:研文出版、1997 年)、P.18。

[45] A 君は鹿港出身の許媽葵(1900-1968)のことを指し、台中一中の第一回生で、その後台中州に就職、役所が佐藤春夫のため、わざわざ地元出身の彼を案内役兼秘書としてつけたのである。

[46] 戴国煇「台湾」、『アジア経済』(東京:アジア経済研究所)第 10 巻第 6・7 号、1969 年 7 月。

[47] 河原功によれば、「殖民地の旅」の作品には佐藤春夫の、被殖民者である台湾人、とりわけ台湾知識人への深い同情が込められているという。

佐藤春夫がA君に「この地方で時間の都合をつけても是非とも一度門を敲くべき名士は」と聞くと、A君は躊躇なく「阿罩霧の林熊徴（本当は林献堂）氏を挙げ門閥と申し人物と云ひ正に本島の第一人者で、もし仮りに台湾共和国といふやうなものでも成立すると空想してみて、その時の大統領はと言へば正しく彼と折紙をつける」と勧めた。[48]佐藤春夫に対し、林献堂は「忌憚ない」態度で次のように被殖民者の自負と不満を述べている。

1、伝統文化の教養と自負

我我本島人自身の自負としましては現在はたとひ無力ながらも古来伝統の深い文明を持つてゐた者であり、その文明の重要な一部分は内地の教養ある方方とも共通のものと信じてゐるのでこの点が複雑になると存じます。[49]

何となれば、人間は本来の性質として向上心を持つてゐる者でありますが、本島人は既に自ら文明人なりとの自負を持つてゐる。さうして忌憚なく申せば台湾に来てゐる一般の役人や商人などの文明よりも高い文明を持つてゐると自負してゐる。その彼らが自分の高い自負を捨ててより低い文明に同化することは人間の本性として肯ぜぬところであります。自負は要するに自惚れ根性で客観的の事実ではありませんが、然も人間は頑としてその自負によつて生活し行動してゐるので、この点は本島人のみではなく内地の方にしても御同様で、してみれば内地人と本島人との文明の高下はこれを客観するためには現状に於てこれを比較し更に遡つては過去の歴史にまで及ばなければならぬとすれば、これは容易に決定し難い加之頑強な自惚れがそれぞれにこれを固守してゐるのだから鴉の雌雄を知る者は遂にない道理であります。[50]

---

[48] 前掲佐藤春夫『霧社』、P.187。
[49] 前掲佐藤春夫『霧社』、P.244。
[50] 前掲佐藤春夫『霧社』、P.245。

2、日本の政策及び日本人への信頼から不満へ

我我は日本政府及日本人の全体に對しては飽くまでも十二分の信頼を抱くことを言明致しますけれどもこの邊陲の地に派遣されて来る役人に對してはそれがどんな令名ある高官であらうともその手腕及人格等に對しては屢々不満を感ぜさせられます。[51]

3、内地人と本島人の不平等問題

総督閣下が赴任されてその對本島人の大方針を言明されるに当つても或は内地人本島人平等と言はれるかと思ふと次代総督閣下は親和と仰せられる。それでは親和かと思つてゐると別の総督閣下が又同化だと仰言る。個個の総督閣下としては矛盾はないかも知れませんがこれを総督府として見ますれば朝令暮改の観無しとも申されませんので、平等と言はれてそのつもりでゐるものが今度は同化と言はれてみると我我本島人としてはその何れを真なりとして奉じていいかを迷はざるを得ない場合がありますので、それは内地人本島人の親和は、内地のお役人より以上に本島の庶民が希望してゐるところであるが、その親和の方法心持として同化であるべきか平等でありべきかはこれを根本に於て明かにして置きたい。[52]

4、平等か、同化か、はっきりさせる

その基礎的精神までがぐらぐらしてゐるのは統治者はともかく被統治者たる我我としては不安極まるものだといふ気持がします。一体平等でありませうか、それとも同化でありませうか。平等とは両者の価値を同等と看做してゐるもののやうに思はれるのに、同化に到つては二つを平等たるものと認めず同一のものたらしめようといふにあるので、然らば何を何に同化するのであるか、内地人が本島人に同化しようといふのならば知らない事、本島人に向つて内地人に同化せよと強要するならばこれ

[51] 前掲佐藤春夫『霧社』、P.244。
[52] 前掲佐藤春夫『霧社』、PP.244-245。

は本島人は容易に認め得ないところでありませう。[53]

最後に林献堂は、この会談を機会に佐藤春夫に「貴下は根本に於て同化論に賛成せられるか、それとも平等論に御賛成か―御参考のために申添へますが現今の総督閣下は同化論者であられたかと思ひます」と、[54]最も答えにくい殖民地支配の問題を投げ掛けた。ちなみに、この会談では、林献堂は上手に日本語が話せるが、わざと中国語の会話を取り、通訳を通じて、上記の意見を佐藤春夫に伝えた。佐藤春夫は林献堂の人物像を「合法的に台湾人の主張をかちとろうとする、積極的抵抗型」として捉え、[55]その民族アイデンティティーを背負い、挫折の念を表す日本観をリアルに描き出したのである。以上のように、林献堂は、日本内地の近代化に関心をもっていたと言うより、殖民されつつある台湾本島における、近代化を促す教育、自由、平等などの問題を重要視していたと言える。

二、戴季陶の日本観

戴季陶（天仇、伝賢、1891-1949）は、中国の四川省漢州（今広漢市）に生まれた。祖籍は浙江省呉興県で、1902 年成都の予備学校で日本語を学び、東文学堂の日本人教習の服部操にも日本語を教わった。1905 年十四歳の時、早くも日本に留学をし、1907 年に日本大学法科に入学したが、学費が尽きで留学を断念し、帰国した。のちに上海で「中外日報社」、「天鐸社」、『光華報』、『民権報』などのジャーナリストとして活躍した。1913 年の 2 月から孫文の秘書兼通訳として日本訪問に随行し、首相の桂太郎と会見した。1917 年に初めて日本への関心を表す「日本観察」を『民国日報』で連載した。1919 年 10 月に中華革命党が中国国民党に改称したのち、党の要職を務め、中国と日本の間を行き来した。1919 年 8 月に『我的日本観』を発表した。[56]1925 年 3 月に孫文が死去後、戴季陶は『孫文主義の哲学的

[53] 前掲佐藤春夫『霧社』、P.245。
[54] 前掲佐藤春夫『霧社』、P.246。
[55] 前掲河原功「佐藤春夫「殖民地の旅」の真相」、P.18。
[56] 戴季陶『我的日本観』、『建設』（上海：建設社）第 1 巻第 1 号、1919 年 8 月。

基礎』、『国民革命と中国国民党』を発表し、「戴季陶主義」として共産党から批判された。1927 年 2 月ごろ国民政府（蒋介石）の命を受けて日本を訪問、各地で日本の武力侵略政策反対を説き続けるのと同時に『日本論』を執筆した。そして、1928 年の 4 月に上海の民智書局から『日本論』を出版した。国共内戦の時から 1949 年（五十八歳）に死去するまで、戴季陶は国民党の理論指導者として、また、日中関係の架け橋の役として、重要な存在であった。

（一）日本研究の動機

1、『我的日本観』執筆の動機

二十世紀の初頭まで、中国から日本へ留学した学生は五万人以上に上る。にもかかわらず、「日本」をテーマにした体系的な研究はあまり見当たらないと、戴季陶は嘆いた。そこで、彼は「日本というテーマを、私の思索と批判能力によって、中国人の前にきちんと腑分けして、一糸乱れぬ形で提示したい」という願望を持つようになったという。[57]当時の中国人の日本に対する認識はあまりにも貧弱であり、ひたすら日本を批判する現象について、戴季陶は次のように指摘している。

> 日本人は「中国」というテーマを、解剖台に乗せて、何百回何千回となく解剖し、そして試験管に入れて何百回何千回となく実験したことか。ところが、我々中国人は逆に、ただ一途に排斥し、反対するだけで、殆ど日本の文章を読もうともせず、日本語を聞こうともせず、日本人を見ようともしない有様である。これは全く「思想における鎖国」、「知識における義和団」というも同然である。[58]

近代化されつつある「他者」である日本を評価せず、閉鎖的な中国人の思想に対して、戴季陶は厳しく批判している。また「中国、イ

『革命先烈先進詩文選集』第 4 冊、唐文権·桑兵編『戴季陶集』（武漢：華中師範大学出版社、1990 年）などに収録。

[57] 戴季陶著·嵯峨隆訳「我が日本観」、前掲嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』、P.141。

[58] 前掲「我が日本観」、P.142。

ンド、ヨーロッパから輸入した文明を除けば、日本には何もない、研究に値することはない」という中国人の自己中心主義な認識に対し、大きな誤りであると戴季陶は指摘し、同時に日本人が中国を語る本はどれぐらいあるか、「己を知り、彼を知れば、百戦して百勝す」という客観性を以て、日本を認識すべきであると中国人に呼び掛けた。すなわち、長い日中関係の歴史の流れの中で、日本人の民族性（風俗習慣）や性格、思想はどのようなものであるのか、さらに日本の国家や政治の運営、社会、経済、歴史、文化などの基礎はどこにあり、どのように発展してきたかを深く認識していかない限り、日中関係はうまくいかないし、日本には勝てない。そこで、自分の十数年にわたる、感覚的で片断的な観察を以て、日本を論評した価値のある本を書いてみたいと考え、『我的日本観』を書いたという。以上の考えは、戴季陶の日本観形成の背景を説明していると見てよい。

2、『日本論』刊行の背景

1927年2月中国国民党が北伐戦争を行っている最中、戴季陶は中央政治会議から日本へ派遣され、自由民権運動の元老西園寺公望（1849-1940）に中国国民革命の目的を説明した。しかし、同年4月に田中義一（1864-1929）内閣が成立すると、日本は5月3日には山東への出兵を強行し、国民革命軍と衝突して「済南事件（五三惨案）」を引き起こした。[59]中国の革命を恐れる田中義一に対して「昨天的田中中將」、「今天的田中大將」の批判文を公表することが、『日本論』刊行の目的の一つであったと思われる。

1928年に『日本論』を刊行する前に、戴季陶は日本留学の経験者である胡漢民（1879-1936）[60]に序文を乞うた。胡漢民は『日本論』

[59] 当時、田中義一は従来の穏健な中国政策と国際協調を基調とした「幣原外交」を破棄して、東方会議を挟んで三度の山東出兵を強行した。第二回目の出兵では「済南事件」を起こして、国際的な批判を招いている。

[60] 胡漢民は清末民初の政治家。中国同盟会以来の革命派人士で、蒋介石と権力闘争を繰り広げたことでも知られる。1912年1月、南京臨時政府が成立した際、臨時大総統孫文を補佐する秘書長に任ぜられ、1914年7月、東京で中華革命党が成立すると、同党の政治部長に任命されている。また、1921年5

を詳細に読んだ上、次のようなコメントを記している。

> 季陶の文章は三つの時期に分かれる。第一期は、「天鐸報」から「民国雑誌」に至るまでで、悠々と述べるのが彼の特質だが、修辞には工夫が必要であった。「星期評論」から「建設雑誌」までが第二期であり、文体は話し言葉を改め、言いたいことを思う存分に述べたものである。修辞も整然としていて、むだな言葉が少なく、大いに進歩した。さらに『日本論』の内容は成熟し、(中略) この本からは科学的批評の方法を摂取できるし、季陶の見識を理解することも出来る。中国人は何故日本の問題を研究する必要があるのか、本書の内容には、すでに詳細に述べてある。我が青年たちが一読すれば、決して知識における義和団にはならないであろう。(原漢文) [61]

戴季陶が『日本論』を刊行する目的は、中国人の日本に対する観察と判断の錯誤を是正すると同時に、その日本批判が日本側に注目されたからであることが見て取れる。

(二) 板垣退助の自由民権思想から見た戴季陶の日本観

1、世界の新文明の受容

戴季陶は「文明」、「人道」を視野に据えた板垣退助のことを近代日本の第一恩人として取り上げている。その理由は、国際視野を持つ板垣退助が自由民権運動、現代文化産業の基礎造り、および立憲制度の完成に多大な貢献を成し遂げたからである。[62]

戴季陶は「板垣退助」の一節で、

> 明治維新の志士たちの思想は、大抵単純かつ復古的なものだった。維新の大事業は、完全にヨーロッパの勢力圧迫を動機としたため、世界の問題に対し、ただひたすら排斥するのみで、新

月、孫が非常大総統になると、彼は総参議に任ぜられ、1925 年 3 月、孫文が死去した後は、大元帥代理となった。

[61] 胡漢民の序文、戴季陶『日本論』(新版、台北：日本文摘雑誌社、1987 年)、PP.25-26。

[62] 戴季陶は、板垣退助が人民の平等のために尽力して多くの業績をあげたため、日本の農民や労働者は彼に感謝していると指摘し、また、日本が今日のように発達したのも、板垣の奮闘によるところが大きいと高く評価している。

しい道を開くことはできなかった。尊王攘夷を有するだけでなく、新しい生命が成り立たなければ、旧生命の存続もできないことを見抜いたのは、ただ板垣退助だけである。必ず世界の新文明を受け入れてこそ、新しい世界で生存することができる。（原漢文）[63]

と述べている。彼は世界の新文明を受け入れることが明治日本が存続するための要であると強調した。さらに、自由民権運動を推進することの重要性について、次のようにいう。

国内の政治においては、民衆の幸福を重視し、民衆解放があってこそ、新しい国家の創出が可能である。（原漢文）[64]

強く自由民権運動を主張することこそ、一切の政治、社会改革の原動力になると戴季陶はいう。ここでは板垣退助の自由民権思想を、革命の理念による政治改革そのものと捉えようとする発想が窺える。

2、戴季陶の「台湾同化会」への関心

板垣退助、林献堂の「台湾同化会」の促進について、戴季陶も気づいていた。板垣退助が台湾人の自由民権のため、八十歳に近い老体でありながら、1914 年 2 月と 11 月の二度台湾へ渡っている。戴季陶は板垣の理念を宣伝する情熱に感服し、次のようにいう。

彼（板垣退助）は日本政府が高圧政策、不平等な待遇による台湾統治に対し、心を痛め、人道的には許せないことと思い、「台湾同化会」を発起した。彼は日本政府が特殊な法律で台湾を統治することを撤廃しようとし、台湾人に憲法上の権利を与えるべきであることを強調した。「文明」、「人道」の観点から、私はこの行為には感服する。日本へ来る度に彼を訪ねるが、会えば会うほど悲しく思う。（原漢文）[65]

戴季陶が老齢の板垣退助に会うと悲しく思う理由は、板垣が常に私財を擲って自由民権運動に身を投じ、演説会場で暴漢に襲われても

[63] 前掲戴季陶『日本論』、P.86。
[64] 前掲戴季陶『日本論』、P.86。
[65] 前掲戴季陶『日本論』、PP.87-88。

「板垣死すとも自由は死せず」というほど自由を愛しているにも関わらず、[66]明治政府の要職も辞任したため、晩年には金銭的に困窮に追い詰められたからである。討幕の有名人、明治維新の貢献者、立憲政治の元祖でさえ、唐朝の白居易が詠んだ『琵琶行』の一句「門前冷落して鞍馬稀（まれ）なり」のように貧窮した。板垣を惜しむ心を表すため、戴季陶は『琵琶行』の該句を「門前冷落して鞍馬無（な）し」に変えた。[67]

（三）戴季陶の日本観の変遷

戴季陶の対日観について、嵯峨隆は初期の活動（中華民国成立前後、日本亡命期）、五四時期の思想、第一次国共合作時期、国民革命時期、満州事変など五つの時期に区切って分析している。すなわち、戴季陶は初期には国家主義の立場から日本の歴史や文化を論じ、五四運動までは提携論と批判的姿勢を並存させているという。[68]五四時期の「我的日本観」では直感的、情緒的な批判姿勢と異なり、歴史的、文化的背景から日本の現状を説明し、後の対日観の基礎としている。そして嵯峨隆は、戴季陶のマルクス主義、日本帝国主義、社会主義への認識について分析し[69]、国民革命時期の『日本論』を戴季陶の思想転換期との関連で分析し、儒家的伝統によって三民主義を解釈しようとする彼の思想は単なる日本の歴史的、文化的考察を目的とするものではないと指摘している。[70]

ここでは、戴季陶の思想背景は単なる日本の歴史的、文化的考察ではないことを視野に入れ、下記の項目について述べてみたい。

1、武士道思想に対する認識とその変遷

以下、封建時代における武士階級の性格と明治維新の武士道精神について、『日本論』に見える戴季陶の捉え方を検討してみたい。

---

[66] 「板垣死すとも自由は死せず」は関西の民権運動家小室信介が出した言説である。拙稿「小室信介的中国観：以『第一遊清記』為探討中心」（2010 年 11 月 13 日、香港中文大学「近現代日中文化交流看現代性及身分認同的探索」国際シンポジウムにて発表）を参照されたい。

[67] 前掲戴季陶『日本論』、P.88。

[68] 前掲嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』、PP.25-26。

[69] 前掲嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』、P.48。

[70] 前掲嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』、P.111。

まず、「皇権神授思想与神授思想的時代化」（第三章）では、

> 「サムライ」という言葉の意味は、明らかに「侍者」の意味である。俗に「家来」というが、これもまた同様である。こうした事実から見れば、「武士道」という主義は、今日の我々の思想から批判するなら、その最初は明らかに「奴道」に過ぎなかったのである。武士道の観念は、つまりは極めて幼稚な「食禄報恩主義」（俸禄に対する報恩の主義）なのである。後になって、山鹿素行、大道寺友山らが、「士道」「武道」を内容とする書籍を著わすようになるが、それは武士道の上に儒家道徳の衣服を纏ったものであったのである。（原漢文）[71]

と述べている。戴季陶は最初、日本の「武士道」を「奴道」、あるいは幼稚な「食禄報恩主義」または儒家道徳思想に便乗したものとして認識した。

一方、彼は日本の武士道発展の流れについて、次のように述べる。

> 制度論、道徳論、信仰論の順で武士道は発展していった。明治時代になって、旧道徳論、旧信仰論の武士道の上にさらに維新革命の精神を加え、ヨーロッパ思想と融合させ、維新期の政治道徳の基礎としたのである。（原漢文）[72]

つまり、徳川時代の武士が主家や民衆のために流した血涙の背景を存分に了解すれば、武士階級が明治維新を成功させた原因が分かるという。彼は、明治維新を武士階級の代行革命とみなし、武士道精神が近代日本の発展の基礎であると考えていた。

また、「武士生活与武士道」（第七章）では、次のようにいう。

> 武士の家系は、藩主の家系に従属しており、武士自身もまた藩主の家系と自分の家系に従属していたのである。このような家系の観念は宗法への神権的権威に対する迷信と密接な関係にあった。そのため、藩主本人や藩主の家系のために戦うという武士の精神は物質的な社会関係や経済関係という結びつきだけで

[71] 前掲戴季陶『日本論』、P.40。
[72] 前掲戴季陶『日本論』、P.40。

> なく、歴史的な因襲にも起源を持つもので、神秘的な雰囲気に溢れたものであった。武士は独特の「生死を軽んじる」、「約束を重んじる」、「意気を尊ぶ」という性格を有する。（中略）また精神面から見ると、彼らの長年の生活意識から生じた道徳と信仰は、主家のためならば自己ないし家族の命をも惜しまずに犠牲に供する、という考えの重要な原因である。（原漢文）[73]

彼によれば、日本の封建時代の武士は家系重視の精神を重んじ、その道徳と信仰にもとづき、命をかけて主家のために尽くすことは、神権への迷信と密接な関係にあるという。そして、日本人に賛美される武士道の精華として「仇討」（殺人）と「切腹」（自殺）の二つの例を挙げている。近代の日本人にとっても「復讐」の行為は高尚な精神の表出とみなされ、最も美しいものと賞賛される。これは「民族的な自画自賛」であり、「復讐」を人類の道徳の基準とすることには賛同し難い、と戴季陶は批判する。

「維新事業成功之主力何在」（第十一章）では、戴季陶はリーダーの人格とその能力は時代を創出する最大の要因であると説き、時代の切実な要求と人民の間に共通した信仰とが明治維新の成功した原因であるという。この二つの原因をさらに「日本民族統一に発展する能力がすでに備わっていた」という歴史要素に帰し、「民族の統一した思想、信仰、力」こそが明治維新成功の原因であると補述している。[74]

戴季陶は明治維新後、日本人が民族間の競争において、「優者」の地位を占めることができたのは、武士道精神に由来する道徳観念によるものと判断した。[75]しかし、彼は四十年に亘って日本の歴史を詳細に検討した結果、日本でよく「食禄報恩主義」を口にしていた武士たちは、今や完全に「町人根性」（信義を軽んじ、金銭を重んじる性質）に同化されており、現在の日本の支配階級は、全く封建時

[73] 前掲戴季陶『日本論』、PP.53-54。
[74] 前掲戴季陶『日本論』、PP.73-74。
[75] 前掲戴季陶『日本論』、P.55。

代の「サムライ」の直系であると批判している。[76]それ故、明治維新史を人道主義の面から観察すれば、それは日本文明史においてはもちろん進歩と見なしうるが、世界文明史の観点から見れば、その内容は極めて貧弱なものだという。[77]

上記のように武士道の形成や、その社会で果たす役割を視野に入れた上で、武士道は「奴道」、「食禄報恩主義」であると戴季陶は批判する。しかし、道徳と信仰の角度から、その思想が明治維新の成功を導き出した点は評価している。また、彼は武士道に対し、決して否定的な面ばかりを指摘するわけではなく、その肯定な面がこれからの日本社会の発展に寄与することを期待する姿勢が窺える。

2、革命に合致した自信（信仰）を見出す

『日本論』の「日本人與日本文明」（第六章）では、戴季陶は次のようにいう。

> 日本人は島国根性から脱出できぬ面がある。欧米を崇拝し、中国を蔑む種々の言行があり、公道の精神にも欠けている。しかし、日本民族の自信と向上心は尊敬すべきである。（原漢文）[78]

ここでは、総理（孫文）の「一つの民族の存在と発展は、その自信の能力による」という論説にもとづき、日本人の民族性と革命の根本思想と関連づけていると考えられる。また、「昨天的田中大将」（第十二章）では、

> 日本は何故強くなり、何故統一ができるのか。如何にして欧州の文化を吸収、組織し、統一した民族文化へと変わり得たのか。それは、すべて日本民族の自信力によるものである。「信仰」は生存の基礎となり、「信力」は活動の骨幹となる。これを見て、中国人は切に反省し、努力すべきである。（原漢文）[79]

さらに、「信仰的真實性」（第二十二章）では、戴季陶は次のように述べている。

---

[76] 前掲嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』、P.176。
[77] 前掲嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』、P.152。
[78] 前掲戴季陶『日本論』、P.52。
[79] 前掲戴季陶『日本論』、PP.123-124。

> 総理（孫文）曰く「主義は信仰なり。つまり、冷静な理知が熱烈な感情に化さない限り、力が生じないことは明白である。どこへ行っても、日本人にははっきりした民族意識が見える。彼らは一種の「日本迷」（ファン）であり、無意識的にその民族意識が極端に高まり作用しているのだ。（原漢文）[80]

ここでは、「信力」、「主義」、「信仰」を定義した上、日本人が持つ高度な民族意識そのものを中国人に伝えようとしている。では「信仰」とは何か、戴季陶はいう。

> 「迷」とは理知の認識が無くなることで、「信」とは純化された感情の力である。我々は人生が「力」の作用であることを知れば、「信仰」そのものが日常生活に最も欠かせない条件であることがわかる。「自強不息」は自信力をもって仕事をすることで、「厚徳載物」は自信力の効果である。「信仰」があってこそ、不滅であることができるし、人はまとまることができる。（原漢文）[81]

なお、「信仰」と生存の意義、革命、三民主義の民生史観と関連して、次のようにいう。

> 「死」という意義から生存の意義を求め、信仰のために生き、信仰のために死ぬ軍隊こそが革命軍である。（中略）思想は生命であり、思想が統一されないと、生命も不統一となる（中略）思想は、信仰とならなければ力にはならない。思想と生命が一致しないと、信仰にはならない。信仰を破棄した唯物史観では人生の意義を説明できぬし、民族が生存する意義をも説明できない。偉大な三民主義、偉大な民生史観。（原漢文）[82]

以上、いわゆる「戴季陶主義」における「信仰」の内容を見てきた。戴季陶は、日本の民族意識である「自信力」を、孫文の革命思想に欠けている中国人（特に革命軍）に呼び掛けようとする意図をもっ

---

[80] 前掲「我が日本観」、P.148。
[81] 前掲「我が日本観」、P.149。
[82] 前掲「我が日本観」、P.156。

ていたと考えられる。

三、翻訳書、著書による外来思想吸収の同調と異趣

イギリス留学の経験者であり、西洋思想を翻訳、紹介し、清末の知識人に大きな影響を与えた啓蒙思想家厳復は梁啓超の師匠でもあった。中国時代の梁啓超は厳復の影響を受けた関係で、日本の翻訳書を通じて西洋の学問を摂取するという知識吸収のルート開発に取り組んだ。梁啓超は 1896 年 6 月に翻訳局の設立の必要性を清朝朝廷に上奏した。[83]彼は 1898 年 10 月以降、亡命生活を営みながら、さらに翻訳書を媒介に西洋学術の受容に進み、西洋思想の新概念を伝統的な中国中心主義の枠組みに取り入れようとした。梁啓超の歴史観は 1902 年 2 月に『新民叢報』を創刊することによって、大きく変容した。[84]すなわち、以後の梁の思想には、歴史の教訓から学ぼうとする伝統的な観念から脱出し、中国にはない新たな「進化」、「国家」、「国民」という歴史意識が見出せる。手代木有児によれば、梁啓超はこれらの新概念を「国民の明鏡」、「愛国心の源泉」として、中国国民の団結や民衆組織の進化を表すものと見なした。換言すれば、彼は歴史を国民的アイデンティティーの源泉として再発見したという。[85]

（一）梁啓超の場合

十九世紀以降、西洋の近代学術を摂取するために、中国と日本においては西洋文献の翻訳が急激に増えた。清朝末期の知識人が日本の翻訳書を通じて西洋文明を吸収しようとすることは、厳復に影響されたものであった。とはいえ、梁啓超の場合、厳復が自分の翻訳する西洋近代思想を中国の正統的地位にある古典思想と対等の地位

---

[83] 沈国威「日本発近代知への接近」、『東アジア文化交渉研究：梁啓超の場合』第 2 号（大阪：関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）、2009 年）、P.220。

[84] この頃梁啓超は初学者のための文献リスト「東籍月旦」を『新民叢報』（1902 年 6、7 月）に発表している。これは中国人に対し、日本書を通じて西洋学術を学ぼうとする一種の呼びかけである。

[85] 手代木有児「梁啓超「史界革命」と明治の歴史学」、佐藤慎一『近代中国の思索者たち』、P.84。

に置こうとしたこととは、基本的には異なる意図を有していた。梁啓超が 1896 年に書いた『変法通議』には、「日本盡取西人之學而學之、遂有今日也」とある。[86]さらに、彼が日本に亡命してから書いた「読日本書目志書後」（1897）には、「日本之歩武泰西至速也。故自維新至今三十年、而治藝已成」[87]とあり、一貫して「明治維新の成功は洋学を学んだことにある」という日本観が窺える。彼は東京で貪るように外来思想を吸収したことについて「讀日本書、疇昔所未見之籍、紛觸於目；疇昔所未窮之理、騰躍於腦、如幽室見日、枯腹得酒」[88]と述べ、その喜びを表現している。

1898 年から 1904 年に至るまで、梁啓超の日本観は徐々に確立していき、「腦質為之改易、思想言論、與前者若出兩人」と述べるほど、明治の文化、思想から大きな影響を受けた。[89]焦潤明によれば、1899 年から 1906 年までに書かれた『自由書』、『新民説』により、梁啓超の日本観は確立されたという。[90]

とりわけ、翻訳書による外来思想の吸収が如何に重要かということについて、梁啓超は「東籍月旦」の叙論で次のように述べている。

> 壬寅癸卯間（1902～1903）、譯術之業特盛、定期出版之雜誌、不下數十種。日本毎日新書出、譯者動數家、新思想之輸入、如火如荼矣。[91]

また、

> 一つの外国語を新たに習得すれば、一殖民地を得たようなものである（中略）我が中国は英語を重んじて、すでに数十年が経ち、英語に通じた者は数千人はくだらないだろう。しかし、嚴又陵（厳復）以上に、その学術思想を中国に輸入した者はいないだろう。（中略）日本と通商して数十年後の今日、なお東籍（日本書籍）を読める者を待たなければならないのは、まさに中国

[86] 梁啓超『変法通議』、『飲冰室文集』之 1、P.64。
[87] 梁啓超「読日本書目志書後」、『飲冰室文集』之 2、P.52。
[88] 梁啓超「論学日本文之益」、『飲冰室文集』之 4、P.80。
[89] 梁啓超「夏威夷遊記」、『飲冰室専集』之 22、P.186。
[90] 焦潤明「梁啓超的日本観」、『近代史研究』1996 年第 1 期、P.213。
[91] 梁啓超『清代学術概論』、P.71。『飲冰室合集』専集之 34。

> の不幸である。幸い、西洋の学問を翻訳した東籍があり、今日東学（日本の学問）を為す者が西洋の学問を修めることができるようになった。これは不幸中の幸である（原漢文）。[92]

と述べている。梁啓超は厳復の「西書中訳」の重要性を感じたため、「東籍」の翻訳書を通じて、中国人に西洋の学問を学ばせようとし、「東籍月旦」の文献リストを作ったのである。日本語に通じることを条件として、梁啓超は「東学」をうまく修めるためには、二十歳以降に勉強を始めた方が効果があると勧める。「東籍月旦」は、倫理、国語と漢文、歴史、地理、数学、博物、物理と科学、法制、経済など諸分野の関係図書を紹介している。例えば、倫理学の分野では欧米の名著から翻訳した『倫理学書解説』(十二冊叢書)を挙げている。歴史学では、世界史、東洋史と日本史に分け、それぞれの参考図書がリストアップされている。特に世界史では、万国文明の変遷や歴史発展の由来を論述する『万国史綱』、『西洋史綱』、『万国政治歴史』などを紹介するほか、和田万吉訳『世界通史』(原作はドイツのカール・プレッツ、Ploetz, Karl Julius、1819-1881)、東邦協會訳『欧洲新政史』(原作はフランスのミュルレル、Muller, Wilheim、1820-1892)、幸田成友訳『十九世紀史』(原作はイギリスのロバード･マッケンジ、Mackenzie Robert、1823-1881)、福井準造･安岡秀夫訳『十九世紀列国史』(原作はアメリカのジャドソン、Judson, Harry Pratt、1849-1927)、大内暢三訳『欧洲十九世紀史』(原作はアメリカのジャドソン、Judson,Harry Pratt、1849-1927)、酒井雄三郎訳『今世欧洲外交史』(原作はアメリカのア・ドビヅール、Debidour, Antonin、1847-1917)、永峰秀樹訳『欧羅巴文明史』(原作はフランスのギゾー、Guizot, Francois Pierre Guillaume、1787-1874) など、当時世界著名な歴史書が紹介され、それぞれ書籍内容の特色、読む価値のある箇所、さらには定価まで細かく記されている。[93]

梁啓超は、政治、経済、法律の分野で学者になろうとする者にと

---

[92] 梁啓超「東籍月旦」、『飲冰室文集』(台北：幼獅出版社、1962 年)、P.527。
[93] 前掲梁啓超「東籍月旦」、PP.533-535。

っては歴史を学ぶことが最も重要であると強調する。日本語の歴史書を、世界史（西洋を含む）、東洋史（中国史を含む）、日本史、泰西国別史、雑史、史論、史学、伝記などの八項目に分類し、その知識を吸収する必要があるという。

桂島宣弘によれば、近世の徳川幕府においては、「翻訳」行為の実践は「不要」、「不在」、かつ「忌避」、「批判」されるものとして、近世帝国が解体される過程で登場したものであるという。[94]しかし、梁啓超が滞在した近代日本は、西洋化の波が東アジアに押し寄せ、かつ清朝の「漢訳西学」の風潮が伝播した時代であった。そのため、世界の歴史書、地理書、天文学書、医学書、蘭書などからの知識吸収とその受容を、開き直って行なうことが余儀なくされたのであろう。他方、梁啓超は、中国人の西洋に対する知識吸収の乏しさを痛感していた。彼は、そのため「東籍」の翻訳書を通じて西洋の学問を摂取する方法に注目し、問題の所在を指摘しつつも、未来の中国を欧米諸国や日本と同じ文明発展国にしようとしていたのである。

（二）戴季陶の場合

戴季陶は留学の経験を生かし、日本の知識を吸収するために、日本人が中国について書いた書籍を読むことを中国人に勧めている。戴が勧める書籍の種類は次のようなものである。

> 哲学、文学、芸術、政治、経済、社会、歴史、地理の各分野のものが数百種に上る。毎月、雑誌に掲載される「中国問題」を論じた文章は数百篇ある。参謀部、陸軍省、海軍軍司令部、海軍省、農商務省、外務省、各団体、各企業から中国に派遣されて長期滞在して、調査に携わった。[95]

戴季陶は日本人が書いた書籍を通じ、日本の諸分野にわたる知識吸収法を読者に紹介する一方、読者に「過去の日本と現代の日本はすべて明らかにすることができた」といい、「詳細な事柄については、

---

[94] 桂島宣弘「東アジアの近代と「翻訳」：近世帝国の解体と学術知」、同『自他認識の思想史』（東京：有志舎、2008 年）、P.140。
[95] 前掲「我が日本観」、P.142。

みなさんが専門の書籍に当たって調べて頂くか、日本の歴史を専門に研究している有名人に聞いて頂きたい。私は「本を読みて甚だしくは解を求めぬ」ものであるから、更に私に何か特別な材料を求めるなら、それは難しい」と説明している。[96]戴季陶は、日本研究の方法として「今を見るには宜しく古に鑑みるべし、古として今に成らざるはなし」[97]と述べており、伝統（Tradition）と近代性（Modernity）を対照する態度で、知識摂取を体系的に行っていたものと思われる。さらに彼は「五十年来の日本は、五十年前の日本の変化してきたものであるが、将来―それも近い将来―の日本はどのように変化するのであろうか。言うまでもなく、このことは現在の局面から推測することができる」という。「古きを温ねて、新しきを知らば、以て師と為すべし」の儒家理論に基づき、日本の歴史を知ることで、新しい知識や道理を推測しようとする方法がここには窺える。

以上、梁・戴の両氏は、訳書、書籍、著作の内容を媒介として日本の知識を吸収するという研究方法において共通していたのである。

おわりに

以上に述べたように、19 世紀末期から 20 世紀半ばまで、強いて言えば、日清戦争以降、近代中国の知識人の国際感覚は著しく変化した。梁啓超、林献堂、戴季陶の三人はそれぞれ亡命者、被殖民者、政治論者という異なる立場と動機から、東アジアにおける「接触空間（Contact Zone）」[98]において、伝統文化と殖民地化、近代化、民主化との関係について如何に対応すべきか、という問題の回答を得ようし、明治、大正期の日本の政界、思想文化界と深く関わった。彼らは自ら異国の地に立ち、日本に視線に据え、異文化と衝突し葛

[96] 前掲「我が日本観」、P.177。
[97] 前掲「我が日本観」、P.177。
[98] 「接触空間」とは、複数の国籍の人々が如何なる媒介をも経ることなく接触し合う空間と定義されている。詳しくは緒形康「接触空間から一九三〇年代の日本と東アジアを考える」、同氏編『一九三〇年代と接触空間：ディアスポラの思想と文学』（東京：双文社、2008 年）の序文を参照されたい。

藤しながら、その思想主張は変遷し、危機と共生に関する様々な経験から独自なモダニズム（Modernism）を模索しようとしていた。

（一）梁啓超

梁啓超の 1911 年の台湾訪問は従来識者により注目されてきた。[99] しかし、台湾訪問時の梁の書簡、詩文―日本と台湾を鑑として中国像を描くもの―についてあまり研究されていないのが現状であった。そこで、本稿では、梁啓超の書簡、詩作の内容を通じて、梁の主観的かつ変化と矛盾をもった日本観を検討した。彼は亡命という不安定な環境の中で、中国と日本、そして「傍観者」として台湾の知識人と交渉した。梁啓超における、「自我」と「他者」のインタラクティブ、衝突と融合など一連の思想連鎖は、政治、外交、経済など現実的な境地の中で進んでいくものであった。梁啓超は、「知識提供者（日本）／知識吸収者（中国）」や「統治者（日本）／被統治者（台湾）といったアンバランスの中で、自分の感情と理性、そして使命感と現実との葛藤の中で、矛盾のある日本像を描いたものと思われる。

（二）林献堂

蔡培火は林献堂について、「標準な中国人」であり、日本化や西洋化を求めず、中国の経典を読破した、多様な思想をもつ啓蒙家であると評価している。彼は自分の財力、見識、教養を以て、憧れの中国維新の人物である梁啓超から西洋志向の「議会設置」などの建言を受け、[100]殖民地下の台湾人のため、人権や言論の自由を改善することに力を尽くした。しかし、いずれも台湾総督府に阻止され、一連の対応策は残酷かつ現実な殖民政策には勝てなかった。彼は被殖民の台湾知識人として、統治者の不平等政策に対し、愛憎が入り交じる感情を有していた。そこには当時の台湾における「近代」の誕

[99] 例えば、林慶彰、陳仕華主編『近代中国知識份子在台湾』（台北：万巻楼図書公司、2002 年）において、梁啓超は姚瑩、劉家謀、劉銘伝、唐景崧、章太炎、孫文、郁達夫、銭鍾書、辜鴻銘などの台湾訪問者と共に取り上げられている。

[100] 林献堂の日記には「小説を読むよりも『飲冰室全集』を読んだ方がもっとおもしろい。任公（梁啓超）はまさに私の良師である」と述べられている。

生自体がもつ政治要素や文化混淆的な現実面が絡んでいた。それを抑えながら、冷静に中間路線を取りつつ、台湾人に対して自立精神、自治能力、漢文教育、漢学研究の必要性を喚起した。林献堂が武力抵抗の路線から非武力抵抗の道へと転換した意識の変化には、梁啓超の影響があると考えられる。また、林献堂は外国の政治情勢を観察して、将来の台湾の民族運動に裨益しようと考えた。そこで、梁啓超の欧米遊歴を模倣し、長男攀龍、次男猶龍を伴って、1927年5月から1928年5月まで一年間を費やして欧米数十か国を遊歴し、『環球遊記』を著した。[101]同書には梁啓超『新大陸遊記・論中國人之缺點』の「中国人は西洋人に及ばない」を引用して「私の鏡と為す」と記してある。そこに、彼の民族性、国民性、現代性ないし殖民地観などに対する考え方の一層の成熟が窺える。[102]

（三）戴季陶

戴季陶は、ジャーナリストから政治家へ転身し、日本に亡命中の孫文に就いて、積極的に民権運動を唱え、強烈な民族意識をもっていた。この点については、梁啓超と同軌であると見てよいが、二人の日本観が形成された背景は異なっている。戴季陶は科挙に失敗した関係で中国で直接日本人教師に日本語を教わった。のち日本大学へ留学し、正式な法科課程で勉学し、現場における法律の基礎知識や日本の伝統文化及び近代化と関わる資料の蒐集、引用、分析の能力、国際知識の養成などを身に着けた。戴季陶は亡命者とはいえ、彼のキャリアは、独学で学んだ亡命者の梁啓超の及ばないところであろう。それに、梁啓超が西洋文明及び明治の思想、学問の価値を吸収する目的は、亡国に瀕した清国の危機を救うためであって、基本的に「改革路線」のビジョンを視野に入れたものと思われる。一

[101] この遊記は1927年8月28日から1931年10月3日まで「環球一週遊記」と題して百五十二回にわたって『台湾民報』に連載された。

[102] 許雪姫「林献堂著『環球遊記』研究」、『台湾文献』（南投：台湾省文献委員会）第49巻第2期、1998年6月、PP.1-33。洪銘水「梁啓超与林献堂的美国遊記」、『旅遊文学論文集』（台中：東海大学中文系編、2000年）、PP.113-164。張恵珍「他者之域的文化想像与国族論述：林献堂『環球遊記』析論」、『台湾文学学報』（台北：国立政治大学台湾文学研究所）第6期、2005年、PP.89-120。などを参照されたい。

方、戴季陶は国民党と共産党の対立、融合の鬩ぎ合いによって、政治変動が激しく繰り返される環境の中で、孫文の「革命路線」に沿った、国民党右派の理論指導者としての視野から、日本観が養成されたと考えられる。

梁啓超は、「改革」のため日本で知識を吸収する過程で、批判よりも賛同を多く表明している。対して戴季陶は、当時の日本の中国政策を批判すると同時に、「革命」活動に全力投球し、日中（国民党側）関係の悪化を懸念しながらも、「革命」の観点から日本文化、思想を批判し、そこから徐々に賛同へと変遷（Conversion）して、日本人の「共同信仰」、「自信力」を見出した。さらに、彼は、もし中国人（革命の賛同者）が孫文の三民主義思想を、日本人のように共同信仰として取り上げたならば、国民党による中国統一（革命）がかなう、と考えていた。日本を敵視する立場から徐々に賛同するようになったという、その日本観の変遷は梁啓超と異なる点である。

言うなれば、戴季陶は中国人の日本に対する認識の欠如を憂えて、多数の論説を著し、日本を厳しく批判したのである。同時に「思想の鎖国」という中国人の閉鎖性を指摘し、幅広く、深く日本の知識を摂取したことによって、伝統文化を批判する姿勢から徐々に賛同していく点に、その思想主張の変遷が窺える。また、日本人の民族性について、「同胞観念の欠乏」、「階級的な強さ」、「対外的競争心の強さ」を指摘している。[103]

三人は異なる背景を有するものの、「自我」の主体性を強調し、「他者」との対話によって民族意識のあり方を語る一方、それぞれ「他者」の中核的な文化要素に憧れつつも優劣関係を見出すという、東アジア知識人の「近代性」に対する思考的共通性が見られる。[104]アヘン戦争以降、中国思想界の伝統文化と西洋文化に対する認識には「全面国粋論」と「全面欧化論」の両極端が存在していることが指

[103] 戴季陶「我的日本観」、P.932。
[104] 徐興慶『東亜知識人対近代性的思考』（台北：台湾大学出版中心、2009 年）の序論を参照されたい。

摘されているが、[105]梁啓超、戴季陶はその中間の路線を歩み、日本の知識を中国人に伝えた。また、林献堂は梁啓超のナショナリズムの提唱に影響されたとはいえ、[106]伝統的な儒生の使命感と熱情に駆られて、台湾人の民族改革に献身的な役割を果たしたのである。

参考文献

崔志海（2004）「梁啓超与日本：評鄭匡民『梁啓超啓蒙思想的東学背景』」、『近代史研究』第4期、PP.179-206。

陳逢源（1941）「梁啓超と台湾」、『台湾文学』第1巻第2号、PP.70-78。

嵯峨隆（2003）「戴季陶と対日観をめぐって」、『戴季陶の対日観と中国革命』（東京：東方書店）、PP.3-11。

手代木有児（1998）「梁啓超「史界革命」と明治の歴史学」、佐藤慎一『近代中国の思索者たち』（東京：大修館書店）。

謝金蓉（2006）『青山有史：台湾史人物新論』（台北：秀威資訊）、PP. 49-67。

『林献堂先生年譜』（1960）、『林献堂先生紀念集』巻 1（『近代中国史料叢刊続編』第 10 輯、台北：文海出版社）PP.30-35。

林幼春「櫟社二十年間題名碑記」、『林献堂先生紀念集』巻 1、PP.38-39。

連雅堂『櫟社』第 1 集序文、『林献堂先生紀念集』巻 1、PP.38-39。

梁啓超（1941）「台湾雑詩」、『飲冰室合集 専集第 5 冊』、『飲冰室専集』之 22（上海：中華書局）、PP.204-206。

梁啓超（1941）「遊台湾書牘」、『飲冰室合集 専集第 5 冊』、『飲冰室専集』之 22、PP.197-207。

矢内原忠雄（1963）「帝国主義下の台湾」、『矢内原忠雄全集』第 2 巻（東京：岩波書店）、PP.371-390。

鍾清漢（1993）『日本殖民地下における台湾教育史』（東京：多賀出版）付表「台北帝国大学年度別教員数及び学生数」、PP. 328-335。

[105] 蔡建国「近代中国知識人における文化近代化思想の論理：蔡元培思想の研究を中心に」、『山田辰雄先生還暦論文集』（東京：勁草書房、1999 年）、P.3。

[106] 黄裕元「論人物研究与民族観：以林献堂之「民族思想」為例」、『史匯』第 4 期、2000 年、P.109。

藤井省三（2000）「佐藤春夫『霧社』解説」、佐藤春夫『霧社』（日本殖民地文学精選集 017、台湾編 5、東京：ゆまに書房）、PP. 1-6。

河原功（1997）「佐藤春夫「殖民地の旅」の真相」、『台湾新文学運動の展開：日本文学との接点』（東京：研文出版）、PP.3-24。

戴国煇（1969）「台湾」、『アジア経済』第 10 巻第 6、7 号。

佐藤春夫（2000）『霧社』、PP.181-250。

戴季陶（1919）『我的日本観』、初出『建設』第 1 巻第 1 号。『革命先烈先進詩文選集』第 4 冊、唐文権・桑兵編（1990）『戴季陶集』（武漢：華中師範大学出版社）、PP.923-949。

戴季陶著・嵯峨隆訳（2003）「我が日本観」、嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』、PP.139-190。

胡漢民序文（1987）、戴季陶『日本論』新版編序（台北：日本文摘雑誌社）、PP.17-26。

梁啓超（1941）「変法通議」、『飲冰室合集 文集第 1 冊』、『飲冰室文集』之 1（上海：中華書局）、PP.1-132。

梁啓超（1941）「読日本書目志書後」、『飲冰室合集 文集第 2 冊』、『飲冰室文集』之 2、PP.51-55。

梁啓超（1941）「論学日本文之益」、『飲冰室合集 文集第 2 冊』、『飲冰室文集』之 4、PP.80-82。

梁啓超（1941）「夏威夷遊記」、『飲冰室合集 専集第 5 冊』、『飲冰室専集』之 22、PP.185-196。

焦潤明（1996）「梁啓超的日本観」、『近代史研究』第 1 期、PP.202-215。

梁啓超（1941）「清代学術概論」『飲冰室合集 専集第 9 冊』、『飲冰室専集』之 34、PP.1-80。

梁啓超（1941）「東籍月旦」『飲冰室合集 文集第 2 冊』、『飲冰室文集』之 4、PP.82-102。

林献堂著・許雪姫等註解（2000）『灌園日記』2（台北：中央研究院台湾史研究所籌備処）。

林慶彰、陳仕華（2002）『近代中国知識份子在台湾』（台北：万巻楼図書公司）、PP.49-92。

桂島宣弘（2008）「東アジアの近代と「翻訳」：近世帝国の解体と学術知」、同氏『自他認識の思想史』（東京：有志舎）、PP.137-154。
緒形康（2008）『一九三〇年代と接触空間：ディアスポラの思想と文学』（東京：双文社）序文、PP.5-13。
許雪姫（1998）「林献堂著『環球遊記』研究」、『台湾文献』第 49 巻第 2 期、PP.1-33。
洪銘水（1999）「梁啓超与林献堂的美国遊記」、『台湾文学散論：伝統与現代』（台北：文津出版）、PP.91-153。
張恵珍（2005）「他者之域的文化想像与国族論述：林献堂『環球遊記』析論」、『台湾文学学報』第 6 期、PP.89-120。
徐興慶（2009）『東亜知識人対近代性的思考』（台北：台湾大学出版中心）序論、PP.v-xxii。
蔡建国（1999）「近代中国知識人における文化近代化思想の論理：蔡元培思想の研究を中心に」、『山田辰雄先生還暦論文集』（東京：勁草書房）、PP.3-25。
黄裕元（2000）「論人物研究与民族観：以林献堂之「民族思想」為例」、『史匯』第 4 期、PP.95-116。

【後記】本稿は 2011 年 1 月 8 日に東京大学大学院総合文化研究学科・台湾大学日本語文研究所共催の「日本を見る視線」国際シンポジウムにおける発表原稿を加筆修正したものである。なお、論文掲載に当たり、二名の査読者より貴重なご意見を賜った。記して感謝申し上げます。